



子どもが笑顔になれることを、
親と一緒に
見つけてやって欲しい！

如水館高等学校野球部の迫田監督



特別対談

子どもの将来を最良にするためには、
自分の立場を主張し他人任せにするのではなく、お互いに歩み寄ることが重要！



(社)三原青年会議所 渡辺理事長

● 今の子どもに感じること

理事長 30年もの間、高校野球と共に歩んでこれ、常にその時代の生徒と接している中で、今の子どもたちにどんなことを感じますか。

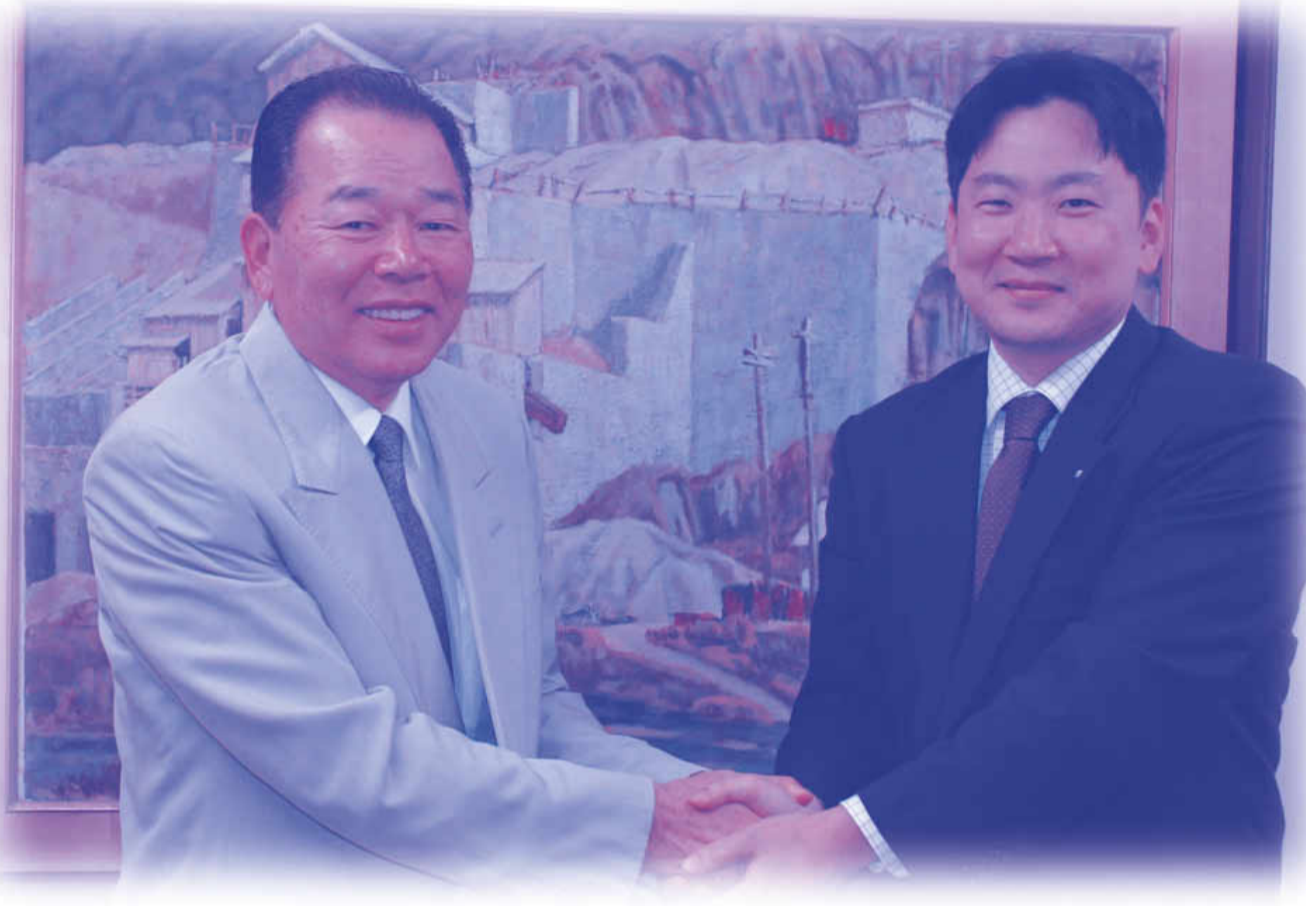
迫田監督 極端ないい方をすれば、今の子は笑わなくなったと感じます。そのせいでウイंकができないなど顔の筋力も弱っていると聞いたことがあります。クールといえば格好が良いかもしれませんが、表情豊かに喜怒哀楽を出せる子どもが少なくなったと思います。それは今の家庭に笑顔が少ないことが大きな要因のひとつであると感じます。

理事長 今の子どもは体力が落ちたとよく言われますが。

迫田監督 今の小学生の1日の歩く量は10,000歩で、30年前は27,000歩だったと聞いたことがあります。そういった意味では体力が落ちて当然だと思います。今の子どもを公園に連れて行っても遊ぶ体力が無いといえますからね。かつて王選手、長嶋選手がすごかったのは、練習に耐えられる体力を持っていたからではないでしょうか。

理事長 他にどんな違いを感じられますか。

迫田監督 私が子どもの頃は、貧しい家も多く、食べるものが無かったので、いろんなものを食べました。だから食べられることに感謝もしていました。今は飽食の時代で、食に対する感謝の気持ちが薄れているように感じます。



● 今と昔とで異なる指導方法

迫田監督 生徒と長年接してきて、最近特に感じることは「私自身の指導方法も時代にに応じて変えてゆかなければならない」ということです。ほとんどの監督は子どもを握ろう(支配しよう)とする傾向があり、自分の思い通りに動かそうとしているのです。昔はそれで良かったのですが今の時代は、それでは勝てないと感じ始めました。

理事長 広商時代、選手としても監督としても甲子園で全国制覇され、勝つための練習・指導方法は完全にマスターされ、如水館高校監督としても幾度も甲子園へ出場されている中で、指導方法を変えようと思われたきっかけは何ですか。

迫田監督 全日本選抜チームの監督をさせていただいたときに、全国レベルの生徒と共に過ごしたことで考え方が大きく変わりました。「監督の考えている以上のことを選手が考

え、行動しなくては勝てない！」ということでした。つまり監督が教えるだけでは限界があり、選手が発想しながら動くことが大事なのです。そして全国の様々な高校を見学させていただいている中、特に駒大苫小牧には驚かされました。

理事長 昨年の甲子園決勝では特に注目を浴びましたが、その翌年と翌々年には優勝している実績もあります。気象の関係もあり、東北・北海道は絶対不利といわれていた中でここまで急成長した裏側にはどんな秘策があったのでしょうか。

迫田監督 彼らは雪の中でもグラウンドを除雪して練習していました。気温も低く2時間が限界です。一般では不利と思える状況が精神力と集中力の向上に役立っているのかもしれない。さらに驚いたのは選手同士で考えさせるためにグラウンド上では先輩と後輩の棒を超え「それがいい」「あれが悪い」などと指摘しあい、選

手同士で練習していたことです。そういった練習ができるようになってから、いい意味で監督が監督にも意見できる関係が出来上がり、成績も上がってきたそうです。

理事長 厳しい上下関係が身につけていることが前提でできることなのでしょうね。やり方を一歩間違えれば、先輩も後輩も無く統制の取れない乱れたチームになると思います。また勝つためには、技術だけでなく精神力や集中力といった気持ちの部分の部分が大切なのですね。

迫田監督 バ・リーグで育った選手の方がセ・リーグの選手より、大リーグで活躍する人が多いといえます。ただの偶然ではなく偏見かもしれませんが、人気の無いリーグを盛り立てようと頑張っている精神力が要因ではないかとも感じます。



● 野球を通しての教育

理事長 野球はチームプレーであり、助け合い、エラーなどの失敗をフォローしあうことでコミュニケーションを取りながら大きく学び育っていくものだと考えます。そしてそれは野球にかぎらず、すべてのクラブ活動をはじめとした団体行動で学んでゆくことだと思います。しかし、親の気持ちはそうではなく技術のみの上達を希望しているように感じます。

迫田監督 確かに親は自分の子どもを第2のイチロー選手や松井秀喜選手にさせ

たくて野球部に入れてくるのです。しかしそれが無理だと感じると、冷めてしまう場合が多いのです。また選手みんながベンチ入りできるよう頑張っている中、当然頑張っても選ばれない場合が出てきます。そのことでむしろ精神的に強くなると思います。一生懸命やったのであれば、目標が達成できなくても多くのことを学べます。

理事長 野球を通して多くのことを学んであります。果立った生徒に対して、望むことは

迫田監督 野球を通して学んだことを糧に、皆、精一杯頑張ってくれていると思いますので特に要望はありません。ただ母校に感謝して関わって欲しいと思います。後輩の指導や金銭的な援助だけではなく、母校を大事にする気持ちを持ち続けて欲しいと思います。



● 父親の存在

迫田監督 父親の権威はなくなった。父親が子どもに嫌われないためにとかいう理由で叱れないとも聞きます。殴ることがいいことだとは言いませんが、子どもが悪い方向に進もうとしていたら、体を張って真剣に叱ることが重要なのだと思います。

理事長 言葉で説明しても分からない子どもには、愛を持って叩くことは必要である私も感じます。私も小さい頃はそうやってしつけられましたが、叩かれなくて分かっていれればやりたい放題だったと思います。

迫田監督 また、最近特に感じることは、母親が父親のことを悪く言う家庭が多くなったことです。そういった家庭でいい教育ができるわけがありません。子どもは見下されている人間からの注意を聞きません。これは家庭と学校の関係にも同じことが言えると思います。

● 親や地域の大人はもっと子どもに愛情を注ぐべきでは

理事長 最近ではPTAに積極的に参加しない親が多いと感じます。自分が楽をしようとしているのではないと思いますが、我が子だけよければいいと考える親が増えたのでは感じます。我が子の成長のために一生懸命になるだけでなく、他人の子を自分の子どもと同じように真剣に叱ってやれ、また一緒に喜んであげられる関係が必要だと考えます。

迫田監督 昔は寿命が短かったうえ、一家に子どもが多かった。そのために末っ子が大人になる頃には親が亡くなっている場合も多かったので、親は子が早く強く成長できるように必死だったと思います。これは一家の中だけでなく、まちぐるみで子どもを育てていたのだと思います。

理事長 かつて親に足りない部分を祖父母が、家庭に足りない部分を学校、地域がという風に、家庭と学校と地域の三者で子どもを見守り育ててきたと思いますが、現代では核家族化やひとり親などの問題で子どもが大人と接する時間が激減していることや、地域では昔でいう「カミナリおやじ」や「おせっかいおばさん」

がいなくなったことで、それぞれの役割ができなくなったと考えます。家庭と学校についてはどのように感じますか。

迫田監督 家庭がすべき躰や地域で学ぶべき自然とのふれあいにしても学校がかなりの比率で背負われているように感じます。さらに今は学校に対し不信感を持っている家庭が多くなったと思います。昔は家庭が学校を信頼していたからこそ「先生の言うことをよく聞きなさい」と教えられていましたが、今はそうではありません。

理事長 例えば「叩く」行為に対しても学校を信頼していれば「教育してくれてありがとう」ですが、そうでなければ「暴力だ、虐待だ」という態度になるでしょう。結局は子どもの将来のことを真剣に考え叱ることは必要なことであり、親が学校を信頼していないのに家庭が「学校で教育してくれ」というのは矛盾している。学校としても「躰は家庭でしてくれ」と言わざるを得ないと思います。我々の目標とするところは、お互いが批判しあうのではなく、すべては子どもの成長のためなので、お互いが歩み寄り協

力することが重要だと考えます。本日はお忙しい中、いろいろとお話をいただきありがとうございました。

● 最後に

過去から現在にわたり高校野球部員と接していらっしゃる監督のお話しを聞くことができました。その中で決して特別なことをしているのではなく、家庭、学校、地域がお互いの立場を尊重し、行動してゆくことが今後の教育問題解決の活路であると確信いたしました。また我々(社)三原青年会議所でも子どもたちに夢・目標を持って頑張ることの意義、そしてその先にある明るい未来を感じてもらえるような事業を行ってゆく予定です。すべては三原の明るい未来のために、市民の皆様にも今後ともご理解、ご協力をお願い申し上げます。